

安全への提言

|||||



製造現場での出来事

すず 鈴 き 木 かず 和 ひこ 彦†

昨今、製造業において現場での対応力が低下しているとよく耳にする。我々を取り巻く社会・経済情勢とともに、製造現場の環境・人が変化している。我々はデジタル病に冒されている。デジタル病は、著者の造語であるが、いつなんどきでもノート PC、携帯を手放せない人々を多く見かける。この患者は、相手の目を見て、自分の頭で考えて、自分の言葉でしゃべることを忘れている。会議でも、プレゼンの最中でも夢中で画面に向かっている。もっとも深刻な症状は、製造現場で「現場に向かわず、パソコンに向かっている」状況である。現場の長・責任者（例えば製造課長）が、机上の PC でデータや情報を見ることで、現場で起こっていることを認識した気になっている。すなわち、自ら動いて現場を確認しない。積極的に現場の情報を取りに行かない。また、現場では、操作手順・作業手順を表面上は理解しているように見えるがマニュアルの行間が読めない。読まない。読もうともしないと言う症状として現れる。結果として、正常状態については理解しているように見えるが、その操作の根拠、背景等の深い知識はない。

事故・トラブルが多い事業所・工場では、企業・事業所トップと現場の乖離が目立つ。製造現場からは、事業所所長・上級管理職は「雲の上のヒト」であり、その姿を見ることもなく、話すこともない。これでは、トップの方針は現場には伝わらない。事業

所・工場内での会話・情報伝達の能力が低下している。昨今の情報・通信技術の発達に伴い、メール、ネットコミュニケーションを多用するが、その反面、直接会っての会話、意志疎通を苦手とする人々が増えている。直接に話さなくてもメールで伝え、言いたいことは SNS で発信する。この会話・情報伝達能力の低下が、現場では「必要なこと」を伝えられない。「気づき」を伝えられない。「ほう・れん・そう」ができないという症状で顕在化している。その結果として、会話をしない職場となり、上下、左右の意思疎通、情報共有ができない状況に陥っている。

重大事故を未然に防止するためには、組織・グループでのチームワークが必須である。この数年の間に、化学プラントにおいて人が死亡する重大事故が引き続き発生している。このような事故については、それぞれ報告書としてまとめられている。事故の原因として、安全意識や安全知識の不足、安全教育、安全管理体制の不備等が挙げられる。特に、異常の全体像が把握できず、危険発現時に適切な安全措置がとれないという問題も生じている。

人（企業の現場運転員、新人、管理職）は、時代とともに変化し続けていることを強く認識する必要がある。トップスのあり方、現場ラインの長の役割、組織の中での個人の役割と責任をしっかりと考え、現場力を如何に高めるかが今後の「課題」である。

† 岡山大学 自然科学研究科：〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1